

松 山 大 学 論 集
第 31 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 9 年 4 月 発 行

アラスカを開拓した日系一世和田重次郎
—— 金鉱発見をめぐる 3 人の協働者の明暗を中心に ——

菅 紀 子

アラスカを開拓した日系一世和田重次郎

—— 金鉱発見をめぐる3人の協働者の明暗を中心に ——

菅 紀 子

北米への日本人移民のうち準州を含むアメリカ合衆国への移民先では、1868年の元年者にはじまる官約移民などの集団渡航によりハワイが圧倒的多数を占めていた。米国本土へはより少し遅れ、ハワイから転航者も合わせて増加していく。やがて1924年の排日移民法により新たな日本人の移民は全面禁止となるが、それ以前にも制限が加えられ渡航は徐々に厳しくなっていった。また動機や置かれた条件から、非合法に渡米した者も少なからずいたという。

本稿は、1892年に米国本土に単独密航した和田重次郎を取り上げる。近年和田の出身地で顕彰活動が活発化し遺品や一部資料も収集されたことから移民先へも協力が求められ、日本と北米双方に顕彰の拠点が形成され交流も盛んとなった。まずこうした活動を確認する。次に和田の移民個人史を概観する。特に和田はアラスカ、カナダの開拓に大きな功績をあげ頻繁に報道された。しかしある時期から急にメディアへの露出が減り、以後不明な点を残したまま孤独死を迎えている。そこで次に、和田がメディアから姿を消した時期に注目し、その経緯と当時和田と関わった2人の人物に焦点を当てる。最後に、和田を含む3人のその後の人生の明暗について、当時の国際情勢との関連に目を向けつつ比較考察する。

〈キーワード〉 移民個人史、アラスカ、ゴールドラッシュ、メディア、市民権

1. はじめに

北米大陸北部は極北に位置し、広大な原野、ツンドラと気候の厳しさが開拓を阻んできた。初期の歴史を辿ると、アラスカは1867年（慶応3年）アメリカがロシアから720万ドルで購入した土地である。日本では明治が始まる。しかしアラスカはその後ゴールドラッシュが始まる1902年（明治35年）頃までは人も踏み込まない極寒の荒野であった。

和田重次郎（1875～1937年）は愛媛県に生まれ、渡米後初期のアラスカ開拓の要となる貢献をし、カナダでも活動した後米国本土カリフォルニア州で没した日系一世である¹⁾。その貢献ぶりは当時の主要メディアである各種新聞その他を賑わせたものの、その存在はある時点から紙上から殆ど消え一旦忘れられていた。

しかし近年和田の移民元愛媛県、そしてアメリカ合衆国アラスカ州、そしてカナダユーコン準州において彼を顕彰する動きが稼働している。2007年、和田が育った愛媛県松山市に重次郎の顕彰碑と銅像が、2016年、アラスカ州スワード市（Seward）でも銅像が建立されたのはその象徴といえる。

こうした顕彰の活発化の恩恵を得て多くのことが明らかとなってきた。そこでまずこれまでに収集された資料と顕彰のあゆみを日本側と北米側に分けて紹介する。日本と北米双方に顕彰会という拠点ができたことで盛んとなった地域間交流に目を向けると、日本の和田重次郎顕彰会はアラスカおよびカナダ側の和田を知る人的交流も積極的に行うようになった。松山の顕彰会は地元アマチュア劇団にミュージカル制作を依頼、2011年と2013年に県内でそれぞれ2回ずつ上演した後、2015年にはアラスカ公演を果たし、愛媛県とアラスカ州との間の和田重次郎を介した民間交流も盛んになった²⁾。一日本人移民を介し後世に日米の地域間で交流の輪が繋がれ次々と交流イベントを打ち出し発展を続けていることは評価に値する。ただ、このミュージカルは和田と松山の母との母子愛をテーマとし太平洋を隔てた親孝行物語仕立てとなっている。

日系移民の観点から和田重次郎を研究対象とするにあたってはより客観的な検証が必要である。また情報通信技術の発展や個人、団体による関心の高まりから新資料や新たな調査結果が出た。それにより先行資料の見直しの必要も見受けられ始めた。

本稿は和田重次郎という移民個人史研究の一端を担うことを目的とし、まず和田重次郎の生涯を概観すると共に、次第に判明した和田の子孫についても紹介する。

次に、和田重次郎がなぜ一旦メディアから消えたのかという点に問題意識を置く。存在が薄れる契機となったのは何か。おおまかに和田の生涯を分けると、活躍期の前半には当時の主要メディアである新聞紙上にその名が躍っている。多岐にわたり特筆すべき功績をあげたためである。ところがある時点からメディアへの露出が極端に減少した。その転換点に当たる時期を探ると、和田がアラスカで金鉱発見に重要な役割を果たした後まもなくであった。金鉱発見にあたっては和田を含む3人の人物が関わりあうが、やがて3人は各々別の人生を歩む。後半生については、紙上から和田の名が消えることはその足跡を追う手段を失うことでもあるため、現時点では情報が希薄で不明点が多い。

そこでメディアへの露出が激減する直前の人物の関わりに注目し、和田以外の2人について紹介、それぞれの生涯を概観し三者を比較対照する。最後に移民をめぐる当時の国際情勢を確認し、3人のその後の人生の明暗を分けた要因について考察する。

2. 先行資料³⁾と顕彰の概要

和田重次郎に関して紹介された日本語による関連著作として次のようなものがある。

東 良三『アラスカ・最後のフロンティア』1973(S48). 7 (アラスカ在住探検)

新田次郎『アラスカ物語』1974(S49). 7 (長編小説)

新田次郎『犬橿使いの神様』1975(S50). 5 (短編集)

谷 有二『人物探検・和田重次郎』「山と溪谷」1979(S54). 3 (雑誌)

谷 有二『オーロラに駆けるサムライ』1995(H7). 4 (小説)

アラスカに在住した探検家の東良三(1889~1980)は、現地で和田重次郎に関する多数の記事に気づく。しかも1930年(昭和5年)に東はシアトルで和田に会ったという記録がある。同時代にアラスカで活躍した日系人にフランク安田もいた。小説家新田次郎(1912~1980)は、東良三から資料を得てフランク安田に焦点を当てた長編小説『アラスカ物語』を書く。同書は映画化され、同名の映画の大ヒットによりフランク安田は一躍知名度を上げる。実はその中に和田重次郎もわずかに登場させていた。しかしそれはフランク安田が犬橿で雪原を一人駆け抜ける和田と一瞬すれ違う程度で、一匹狼のギャングラー的に描かれているにとどまっている⁴⁾。新田が次に発表した短編に、わずかだが和田重次郎を主人公にして書いたものがある。それが『犬橿使いの神様』である。その後、新田は和田と同郷である愛媛県出身の谷有二(1939~2013)に和田重次郎の小説を書くよう勧め、谷の『オーロラに駆けるサムライ』の出版の運びとなった。谷はジュノー、アラスカ大学など丹念に現地調査をし、新聞記事を材料としてドキュメンタリー小説ともいべきものを書き上げた⁵⁾。それが谷の上記二作である。

フランク安田は第二次大戦中日系人強制収容所で過ごし、戦後まで生き延びた。加えて映画化により一気に知名度が上がったが、和田重次郎に関しては大きく取り上げられることはなかった⁶⁾。

移民元における顕彰の経緯としては、上岡治郎(1926~2007)が和田重次郎の顕彰を始める。和田が育った松山市日の出町出身の上岡氏は同校区松山市素鷲小学校校長を退任後、幼時に父から聞いた外国で活躍した町内の人物のことを子供達に語り継ぎたいという思いから顕彰会を立ち上げ調査を始めた。その

過程で上岡は和田の母が残した遺品資料を保存している重次郎の異母兄の孫和田利百（2018 没）と知り合い、後に資料は顕彰会へ委託された⁷⁾。またドキュメンタリー小説（1995）の執筆者谷有二とも繋がり、郷里における和田重次郎顕彰活動は着々と進んだ。2007 年、上岡は自費も投じ日の出町に和田重次郎の胸像を建立したがその 3 週間後没した。遺志を引き継いだ長男幹夫は顕彰会事務局長として資料を管理するとともに、5 度のアラスカ訪問とアラスカ側の関係者との交流、情報交換、ガイドブック、和田の生涯をダイジェストに描いたコミック、紹介動画の制作、各種シンポジウムの開催等積極的に活動した。また、胸像に隣接して顕彰碑が建立され、2016 年には 1 に言及したミュージカルのアラスカ公演記録をその顕彰碑に加筆して刻むに至る。一方顕彰会は 2019 年、収集したすべての資料を公開する国際ウェブサイトを開発した。当サイトでは、谷有二没後父の代理で現地調査した子息の真人が情報提供に寄与しサイトを構築している。

北米側では米国人アラスカ州アンカレッジにアラスカ側の和田重次郎を顕彰する有志があり、窓口としてアラスカ大学教授の日系三世 Anthony “Tony” Nakazawa が務めている⁸⁾。カナダではユーコン準州ホワイトホース（White Horse, Yukon）在住の JCAY（Japanese Canada Association of Yukon）会長鳥飼文彦が現地で顕彰活動をしており、パネル展示も行った⁹⁾。

米国における資料では谷の作品執筆の資料となった新聞記事の蓄積を顕彰会がリスト化してある。新聞記事以外の資料として以下のものを確認している。

- ・ Robert De Armond（1911～2010）「This is my country」雑誌 Alaska（1983）

Armond はアラスカ新聞の記者であった 1975 年、シアトルの日系二世 Norio Mitsuoka の当時中学 2 年生の娘が重次郎のことを調べようとして Armond に問い合わせたことがきっかけで和田について調査を始め、上記の記事を執筆するに至った。

・ Norman Kagan (1943～)

Kagan は作家¹⁰⁾で、和田重次郎に関心を持ちアラスカでかなりの関係資料を収集している。和田の一人娘 Himeko (ひめこ) は O'Hare という姓を持っていたことから、子孫の追跡のため全米の O'Hare という姓の人宛に手紙を送り、日米子の子孫を突き止めた。しかしある時点から O'Hare 家親族とも愛媛県松山市の顕彰会とも音信不通となっている。交信を再開し資料の公開を求めたい¹¹⁾

・ 現地訪問と資料

これまで確認されている和田重次郎の資料は主にアメリカ、カナダ現地の新聞記事やその他の文書と、故郷の母に届けられた私信書簡や写真、そして母に送ったアラスカの土産物の二種類に大別される。新聞記事に関しては、谷有二が著書を執筆するにあたり調査したものを谷の没後顕彰会が委託保存しているものを中心にリストを作成してあり、その数は110本(2018年9月時点)に及ぶ。しかし未収集の記事、資料がまだ米国・カナダ両国に埋もれていると考えられる。母親に届けられた郵便物のなかに一部現地の新聞記事の実物もある。幸い母親が保管した資料は散逸しないまま異父兄の孫に引継がれたので和田の消息がある程度判明した。

筆者は顕彰会事務局長に同伴し2016年9月アラスカへ赴き現地3つの博物館を訪問した。アンカレッジ郊外のワシラ市(Wasilla)にあるドロシー・ページ博物館(Dorothy G. Page Museum)ではCuratorのBethany Buckinghamにより展示解説があった。設置している和田重次郎コーナーは前年よりさらに充実させており、2017年アラスカを再訪した際にはワシラ市制100周年記念年として犬橇の記念碑を建て重次郎のプレートを正面に配してあった。

ワシラ市からほど近いクニック(Knik)にはクニック博物館-アラスカ犬橇使い名鑑(Knik Museum-Alaska Sled Dog Mushers Hall of Fame)がある。2階に歴代のマッシャーを肖像画と資料で展示しており、なかでも重次郎の展示が

多いことを確認した。

カナダユーコン準州ではホワイトホースからセスナ機でドーソン市へ移動、ドーソン市立博物館（Dawson City Museum）を訪問、Executive Director Alex Sommerville と面談した。2017年に博物館を大規模リニューアルする青写真を示し、人物顕彰のコーナーを新設する予定である。重次郎コーナーも検討することとなった。続いて市庁舎にてドーソン市長 Wayne Potoroka と面談。ドーソン市制100周年を迎えるにあたり、市長は当地域の世界遺産申請をしたいとの意向を漏らした（談話）。世界遺産認定には自然だけでなく人間の働きも必要である。この観点はあらためて和田重次郎が再評価されるに相応しい人物であることを示すと考えることができる¹²⁾

3. 個人史と子孫

3.1. 生涯（※間に [] つきで国際情勢を挟む）（資料1）

1875年（明治8年）1月6日、和田重次郎は愛媛県周布郡（現西条市）に小松藩の武士源八とセツとの間に生まれる¹³⁾。源八が幕藩体制の瓦解で武士の身分を失い、重次郎が4歳のとき病死すると、セツは重次郎を伴い松山市新場所（現日の出町）に移る。当時新場所は製紙業が盛ん¹⁴⁾で、1886年（明治19年）、母の親戚である戸田製紙で働く。この頃重次郎は「アメリカへ行って住友になる」という大志を周囲に漏らしていた¹⁵⁾。これが重次郎少年の「渡米熱」（日比、2014）¹⁶⁾の火種であったのだろう。生地西条市の隣、新居浜市には別子銅山があり、住友財閥が手がけていたことに触発されたと考えられる。1890年（明治23年）松山の海の玄関口三津浜に出て山谷運送店で働いた。翌年三津浜港から神戸へ出奔する。

1892年（明治25年）17歳のとき茶箱の中に潜みアメリカに密航、サンフランシスコに上陸する。しかし密航のため夜中にボートで密かに上陸し、波止場で英語を習得する術を求めて接触した人物に騙され、捕鯨補助艦バラエナ号（Balaena）に乗せられ気がついた時には北氷洋の船上におり、否応なく船室給

仕 (cabin boy) として3年間の労働契約をさせられる。しかし船長ノーウッド (Captain Norwood) は重次郎に英語、地理などを教えてくれた¹⁷⁾。船内の図書館の蔵書を全て読了したという。ただしこの経緯は Armonod の記述によるもので表現に多少の脚色をつけた可能性は否めない。

越冬のため停泊していたカナダのハーシャル島で現住民族イヌイット¹⁸⁾ や犬橇と出会う。マッシャー (musher)、犬橇使いのスキルはこの頃から身につけていったと考えられる。

[1894年(明治27年) 日清戦争勃発]

契約を終え捕鯨補助艦を降りた翌年1896年(明治29年)、21歳のとき一時帰国し、松山の母に孝養を尽くす。東京、京都など旅行にも連れて行く。だが正規の学校教育を受けていない自分は日本にいても出世の見込みはないと悟り再渡米を決め、1897年(明治30年)22歳でアラスカへ戻る。

再渡航の際は横浜から客船に乗ったという。初回は密航だったが2回目は合法的な渡航だったのかあるいは再び密航だったのか? これについて2017年に外交資料館で渡航記録を調べたが、和田の旅券を発見することはできなかった。乗船名簿については未確認である。再度密航であったとすれば和田が生涯市民権取得を許可されなかったことに尾を引いたのだろうか。後に考察する。

和田はアラスカに戻るとノーム (Norm) で倉庫番をしながらエスキモーさえ恐れていた北極圏の奥地探検を繰り返し、犬橇使いの名手となる。

また氷に閉じ込められたニューポート号 (Newport) を補給船ジェニー号 (Jenny) 乗組員としてポイントバロー (Point Barrow) に寄港、遭難した捕鯨船ナパック号を救援する。その後自分達もスミス湾 (Smith Bay)¹⁹⁾ に閉じ込められた際、重次郎は犬橇を駆使してカリブー猟を行い、ジェニー号と補助船ニューポート号の食料を調達し乗組員の命を繋いだ。

この頃 E. A. マキルヘニー三世 (E. A. McIlhenny)、後のタバスコ創業者と知り合う。きっかけは和田が困っているマキルヘニーを救助、以来2人の友情が続いたと考えられる。

1903年（明治36年）28歳のとき、毛皮交易商をしながらアラスカ、カナダで金鉱掘りをする。まずタナナ（Tanana）平原チェナ（Chena）で金鉱を発見する。これをフェアバンクス（Fairbanks）（当時この地名は存在しない）へ行き発掘許可の登録をするよう頼まれ単身乗り込むが、そこが混乱しており埒があかないと察した重次郎はさらに犬橇を駆って前人未到の地を進みドーソン（Dawson）まで行き着く。そこで登録をしたところ、地元新聞ドーソン・デイリーニュースでトップ記事となったため、アラスカ史上名高いゴールドラッシュ、タナナ・スタンピード（Tanana Stampede）を誘発させた。

和田が開拓したタナナ（Tanana）からドーソン（Dawson）までの雪道は犬橇レースユーコンクエスト（Yukon Quest）の原型となる。（資料：地図）

[1904年（明治37年）日露戦争勃発]

1906年（明治39年）、エスキモーの生活向上に尽くし、三つの村を統括しKingと呼ばれる。

1907年（明治40年）、ノーム（Norm）で50マイル（約80キロ）の屋内マラソンで連続優勝する。

1908年（明治41年）、ドーソンから北極海沿岸を5,000マイル（約8,000キロ）にわたって犬橇で探検する。

1909年（明治42年）、スワード（Seward）商工会議所より、スワードからアイディタロッド（Iditarod）鉱山までの雪道開拓を依頼され、30隊の犬橇チームを率いて調査した²⁰⁾

1913年（大正2年）、この年号と重次郎の名前の入った地図がある。ニューヨークで作成されたものであり、ちょうどマキルヘニーと協働している時期に重なる。したがってこの地図を作成して大規模金鉱発掘の資金提供を依頼しようとしていたのではないかと考えられる²¹⁾

[1914年（大正3年）第一次世界大戦勃発]

1914年（大正3年）、ワダスパイ説が流れる。またリンチにかけられそうになり、身の危険を察した重次郎は身を隠す。和田の娘日米子は行方不明の父の



資料1 和田のアラスカ・カナダ開拓関連地図

(和田重次郎ガイドブックより菅紀子が編集)

搜索願いを新聞に掲載する。

1920年(大正9年), カナダ政府の油田調査員となり, 北極圏からマッケンジー川(Mackenzie River)全流域を探検する。

1937年(昭和12年)3月5日, 62歳のときサンディエゴ郡病院で死亡する。発見された死亡証明書にはいくつもの齟齬があったが, 本人と考えられる。共同墓地に埋葬されたが現在墓は区画整理されたため存在しない²²⁾

3.2. 子孫(資料2, 3)

和田重次郎には一人娘^{ひめこ}日米子があり, 英語名を Helen Silveira という。娘の命名には和田の希望が感じられよう。和田の妻の記録はなく, エスキモーの酋長の娘との子とも言われたが生まれ育ったのはサンフランシスコである。常に

アラスカ、極北を移動する和田は娘の養育を定住者に託したと考えられる。

日米子は5度結婚した。5度の結婚に至った理由は不明だが、父から相当の送金を得ていたため余裕があり、男性も日米子の資産も含めて惹かれたとの説もある²³⁾ 日米子は O'Hare, Wight, Medeiros, Peters そして Maddock という5つの姓を持つ。2005年、Norman Kagan はそのうち O'Hare が珍しい姓であるため全米のオヘアという人に手紙を出したところ、その一族の家系が明らかとなった。(資料：家系図)

Helen (日米子) の母、つまり和田の妻とされる人物は Mary Silveira といい写真で見ると限り純粋な白人であり、子孫はそれが和田の妻だと思い込んでいた。しかし日米子の褐色の肌と東洋系の顔立ちを見ると違和感がある。また、重次郎が松山の母に送った写真の中に妻の写真がない。そこで今では、妻は早く亡くなるなどして預けられ Mary は育ての親ではないか、と憶測されている。

げんに、日米子の孫の一人 Richard M. Medeiros の息子 Richard T. Medeiros が DNA 鑑定をしたところ、日本人の血が混じっていることを確認した。しかしポルトガル人の血は一切混じっていなかった。

2016年5月、一曾孫の一人 Michael O'Hare (カリフォルニア出身、牧師としてフィリピン在住) が松山の顕彰碑加筆記念式典に参加した。この時の聴き取りで M. O'Hare は、学生時代友人に「お前は眠くなった時だけ顔つきが日本人みたいだ」とからかわれ、何の根拠もない冗談だと思っていたことが正しいと判明し腑に落ちたと回想している。

2018年9月、筆者はカリフォルニア州 San Jose²⁴⁾ に上記の Richard T. Medeiros の従兄弟である David O'Hare に面会した。David も DNA 鑑定を受け、自分の中にアジア人の血が17%混じっていることを突き止めていた²⁵⁾

いずれにしても、日本人の血が混じっていると言われた当事者一族は、その出自を知って驚嘆したのである。事実を呈示されても未だに受け入れられない親族もいる。子孫についての追跡は未だ途上にあり今後のさらなる調査が必要である。

資料2 Jujiro Wada Family Tree (Japan)

Sumie (スミエ) (先妻)

Heitaro (平太郎) — Yaotoshi (八百利) — Toshio (利百)
 大正9年9月7日没 昭和46年10月22日没

Dainin (大忍, 勝國寺27世住職)
 安政2年2月21日生。県内のお寺に預けられ勝國寺(東京都世田谷区)の住職となる。

Ryuzo Taizo (瀧藏) 高岡家へ明治11年10月養子に行き, その後小松に帰る。大正元年9月24日没

Konin (宏忍, 勝國寺28世住職) — Kenzou (顕三, 29世) — Seiji (精司, 現30世)
 明治16年3月23日松山市にて出生
 昭和29年12月11日没

Aki Takaoka (高岡アキ) 明治26年12月4日没

Makie (マキエ) 明治12年8月没

Genpachi (源八) Wada 明治2年2月セツと結婚。18日に入籍。明治12年5月没

Shingo (進吾) 明治20年9月6日没

Jujiro (重次郎) (1875~1937) 明治8年1月6日生・昭和12年3月5日没・昭和60年2月24日死亡認定)

Helen Silveira (日米子 1900~1965)

不明 (日米子の実母) / Mary Silveira (育ての親?)

Setsu (セツ) (後妻) 嘉永5年(1852)11月8日生・明治2年2月18日妙口の村上助六次女に入籍。昭和8年8月14日没

4. メディア上の転換点

1914年を機に、和田重次郎の足跡を辿ることは困難となる。同年の出来事を見ると第一次世界大戦が勃発、俄かに和田スパイ説が燻った要因として世界的アジア人排斥のうねりと重なる。本稿冒頭に言及したように、排日移民法の成立は和田スパイ嫌疑の10年後の1924年だが、逆に10年前の1904年には日露戦争が勃発し、日本が勝利すると、欧州ドイツで発生したアジア人脅威説、いわゆる黄禍論がアングロサクソン系のアメリカ合衆国民にも波及したため、和田のように際立って活躍を見せる日本人に対し不安を抱き始めるのも道理である。1907年～1908年、日米紳士協定が合意に至るまでに、日本人労働者の渡米は停止され、移民制限は徐々に締め付けを強めていた。

一方米国の国境付近で起こっていた移民状況という条件でカナダを隔てて有する国土の北端アラスカから転じて南部に目を向けてみると、紳士協定以降排日移民法成立（1924年）までの間、外交上反日感情を恐れた日本の外務省は日本人の集住するカリフォルニア州と国境を接するメキシコへの移民を抑制し、1924年以降は逆に「呼び寄せ移民」の形で急増したという（徳永2018, 67）。アメリカ合衆国南部国境地域でこのような操作がなされるのは、米墨両国にかかわるトランスボーダーな日系移民の存在がちらつくからであろう。カリフォルニアといえば、先にゴールドラッシュが起こった地であり、それが下火になった頃アラスカでゴールドラッシュが発生した。金鉱掘りは金が出そうな土地を転々とするので、カリフォルニアで頭打ちとなって欲求不満を膨らませていた輩がアラスカにどっと押し寄せ、和田が起爆剤となりタナナスタンピードとして現象したと考えられる。加えてアラスカはいわばカナダを越えた国内の北のトランスボーダー的場であり、さらには内的ボーダーを越えたアラスカは多く前人未到のフロンティアである。その地平で数々の偉業を成し遂げる和田を称賛する端からその地図を日系色に塗られるわけにはいかないという焦燥と嫉妬が無意識の中に浸潤していく。こうして日系移民の和田が目につき、実際

リンチ未遂に発展した。また世論として日系人スパイ説が拡散し始める時期とも重なる。これらが報道の言説においても反日感情を露わにされていったと解釈できるのではないか。

この時点までの和田の功績を振り返ると、難破船を救出した手腕、犬橿レースやアラスカ鉄道の元となったアイディタロット (Iditarod) 雪道の開拓、金鉱発見の登録のために開拓したドーソン (Dawson) ルート、その金鉱発見の最初の報告者としての名声とその報道が引き起こしたタナナスタンピード (Tanana Stampede)、エスキモーの通商取引の仲介役として得た信頼、加えて屋内マラソン大会の3度の優勝、等メディア紙上を沸かせるに十分な出来事を連発していたため新聞紙上への露出も自然であった。したがってこれらのメディア報道から和田の足跡を追うことは道理といえる。しかし、その報道量はある時点から激減し、言説内容そのものも称賛から一種悪意の籠ったものとなり、その存在は忽ち消えてしまうのである。人々の意識はそれほどとも簡単に変えられるものなのかと疑問も湧くものの、いずれにしても和田重次郎の存在が一旦忘れられたのは和田がメディア (当時の新聞紙上) に登場しなくなったためである。それはなぜか。次に直接要因と背景要因を検証していく。

リンチ説については、金鉱発見にあたり和田を含む3人の協働から生じた。次章でリンチ未遂について明らかにする。続いて、和田の生涯については既に概観してあるので他の2人について紹介する。スパイ疑惑²⁶⁾は主に同時期大規模コミュニティを形成しているハワイやカリフォルニアの日系人に降り掛かった日系人の受難だが、アラスカの和田もその例に洩れなかったことになる。

5. 金鉱発見をめぐる協働者

5.1. 経緯

和田は二つの運命を享受した。一つは米国に戻った際アラスカのゴールドラッシュに遭遇した幸運、もう一つは日露戦争を経て第一次世界大戦へ突入す

る時代に遭遇してしまった不運である。はじめの幸運は後の不運により剥奪されてしまった。

運命の転換点とは具体的に、和田へのリンチが計画され直ちに組織化されたことである。一攫千金を狙いタナナ平原チェナで金鉱を発見した時行動をともにしていたのが日本人移民和田、イタリア人移民フェリックス・ペドロ（イタリア本名 Felice Pedroni, 改名して米国名 Felix Pedro, 1858～1910）、そして米国人 E. T. バーネット (Elbridge Truman Barnette, 1863～1933) 通称船長 (Captain) バーネットであり、3人は協働関係にあった。この3者を比較対照する。

まず発見した金鉱を掘るため発掘許可登録をするにはタナナから役所のあるフェアバンクス (Fairbanks)²⁷⁾ まで行かなければならない。当時その間の道はなかった。船長バーネットは登録を重次郎に依頼し、重次郎は単独で犬橇を駆ってフェアバンクスまで行き着く。ところがそこは大変混乱しており埒があかない。和田はそこに見切りをつけるとさらにドーソン (Dawson, Yukon Territory) (現カナダ, ユーコン準州) を目指して原野を進んだ。そして見事ドーソンに行き着いた。そこで発掘登録をすると、地元紙ドーソン・デイリーニュースがトップで伝え、ドーソンからタナナへ雪原の中金鉱掘りが長蛇の列をなして押し寄せるアラスカ史上有名なタナナスタンピード (Tanana Stampede) を起こしたことは前述のとおりである。タナナでは金鉱掘り達が我もと探し始めるのだが生憎暫く見つからなかった。そこで和田、ペドロ、バーネットの3人に嘘の嫌疑がかけられた。ところが非難の矛先は和田のみに集中したのである。それはアジア系移民とイタリア系移民とアングロサクソン系米国人への対応の違いをあからさまにしたといえる。バーネットはむろん、同じ移民でもイタリア系白人のペドロには咎めが向かわなかったのである。

つまり、身の危険を冒してドーソンまで発掘登録に行ったのは和田1人、ほかの2人はチェナで待機してただけで登録の権利を獲得する。苦労したのは和田だけであった。さらに、直ぐに金鉱が見つからず怒りの矛先を向けられたのも和田のみであった。

移民に対する差別だったのならばペドロも同条件であるが、ペドロは咎めを受けていない。ペドロと和田は白人とアジア人という人種の違いにより運命が分かれたのだろうか。実際はそう単純なものではないが、同じ移民でもペドロと和田との間の温度差は歴然としている。この大衆の差別的行動はアラスカの地域的排日ムードよりも、日露戦争後ドイツで発生した黄禍論が北米に及んだことまで視野を広げ、ヨーロッパを含めた大局的視座が必要であろう。さらに第一次世界大戦における黄禍論の再燃による米国大衆の心理的变化が影を落としたのではないか。

金鉱掘り達は直ぐ金が見つからなかったため怒りの矛先を協働した3人ではなく和田のみに向け、身の危険を察した和田はリンチに遭わないよう咄嗟に先手を打ち失踪したのである。身の安全を確保する意味においては機転が利いていたといえる。結果、Jujiro Wada, また通称 James Wada の名は新聞紙上から消える。これが直接的原因である。そして和田は地下に潜りエスキモー部族との毛皮取引業に専念する。しかし金鉱についての情報を持っているものの直接事業を行うことができないため、米国人投資家の援助をする形で手数料を得ていたと考えられる。時間のずれはあるかもしれないが、明らかに交渉を持っていた象徴的人物はタバスコ王マキルヘニーである²⁸⁾ さらに詳細は未確認だが、2017年11月愛媛県松山市で和田重次郎顕彰会による国際シンポジウムを開催した際、招待したパネラーの一人でアラスカの顕彰窓口になっている Tony Nakazawa は「和田と協働した資産家はタバスコ王マキルヘニーだけではなく、他にも複数いた模様であり、たとえばテキサコ石油の創業者とも関係を持っていたことがわかった」旨を口頭でコメントした²⁹⁾ 単純化するとアジア系移民と白人米国市民の役割分担から決まる権利構図が見える。さらに、2019年5月和田の国際ウェブサイト公開プレゼンで、谷真人は和田がロスチャイルド、グッゲンハイム、またアラスカ鉄道を建設した J.P. モルガンとも交流があったことやアムンゼンと面識があったこと等、有力者達との接点を示す資料を示した。実はこれらの情報は真人の父谷有二が著書執筆までに収集した資料

の中にあったが、取捨選択の際盛り込まなかったものであり、ウェブサイト公開を機に初公開された。これほど多数の米国人有力者と交流があったことは注目に値し、今後の研究が期待されよう。

5.2. 協働者バーネットとペドロ

金鉱発見で協働した3人のうち、和田以外の2人の人生の軌跡をみる。バーネットはオハイオ州出身の白人米国人である。商才にも長け、金鉱掘り相手の商店も経営する。川を伝って船で商品を運んでいたので通称船長と呼ばれたのである。こうして寧ろ金鉱掘り相手に物資を高く売りつけて懐を肥やした。僻地のため余所で買うところがなく商売は独占状態にあり、客であるスタンピーダー(金鉱掘り)達は高額でも買うしかなかった。その怒りが和田へ降り掛かったとの一説もある³⁰⁾ バーネットは金融業にも手を出し、権力を得てフェアバンクス初代市長にまでなるのである。当地へ至る以前1886年に馬取引で仕事仲間を騙し4年の刑を受けている。前科のある市長である。ついた肩書はユコン川船船長、銀行家、詐欺師、そしてフェアバンクス市創立者。

ペドロはイタリア移民一世である。健康を害し長命ではなかったが、アラスカに骨を埋めアラスカ移民開拓者として現地に銅板が建立されている。2017

Fanano e il Giappone si gemellano nel nome di Felix

Delegazione dal Sol Levante in paese per celebrare l'esploreatore nipponico Wlada e l'avventura con Pedroni

di Elisabetta Montecchi

Il Giappone è un paese di grande fascino. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità.



Felix Pedro & Jujiro Wlada



30 I due personaggi sono stati fotografati nel 1902 in Nord America nel momento di imbarcarsi per la spedizione e la nascita dell'azienda.

Il paese è un paese di grande fascino. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità. Un paese che ha saputo unire in un unico edificio la tradizione e la modernità.

年9月、顕彰会事務局長と筆者はペドロの生地イタリアのファナーノ (Fanano) を訪問し、現地で顕彰活動をしている Massimo Tourchi に面会、情報交換をするとともに現地博物館にてペドロと和田の紹介イベントを開催した³¹⁾。ペドロの生家、洗礼を受けた教会は本人の没後遺体を故郷へ運び一時安置した場所でもある。そして墓、複数の記念碑について説明を受け、3人のペドロの子孫にも紹介された。(資料4)

ペドロの移民個人史を簡単に紹介する³²⁾。フェリス・ペドロニ (原名) は1858年トリニャーノ (Le Teggie, Triagnano) にて6人兄弟の5番目に生まれた。家は貧しく無学で読書もできなかった。1870年、12歳の時父が没し、さらに困窮すると1879年フランスへ移民し、鉱山で働くが仕事は厳しく、やがて兄の Fabiano と共に渡米する。1881年、Felice はもう一人 Domenico なる人物と帰郷するが同年単独で再渡米、ニューヨークの Castle Garden Immigration Center に上陸する。Ellice Island はそれより後に建設されたものである。イリノイ州 Peoria で Fabiano と合流し、鉄道関係の炭鉱で働く。1883年兄弟喧嘩の後独立立ちし、オクラホマ州の Indian Territory で農場労働、コロラド州の銀山師となりユタ州では石炭掘りを経てオレゴン州の鉱山で安定職を得る。1884年ワシントン州へ行き、炭鉱や多数の鉱山で働く。そこで Trevis の二兄弟と友達になり、ベルギー人の助けで帰化申請を提出、受理された際アメリカ風の Felix Pedro に改名した。そしてウェールズ出身の友人 Lewis Jones が鉱山で死んだのを機に金を探しに北方へ向かう。カナダの British Columbia で無為に終わった後、1895年アラスカへ向かい、カナダ、ユーコン準州 Forty Mile に到達する。そこでは興味を失いアラスカのサークルに移った。だがその地で有名なクロンダイクのゴールドラッシュはその1年後に起こっている。1898年には一度金を発見したが再度見つけることはできなかった。1901年、友人とタナナ川に戻った際、蒸気船の船長バーネットと知り合う。そして同年9月3日と4日に98年に見つけた金の痕跡を発見し、サークルへ登録に行く。すると大勢の者が押し寄せその中で口論をした後物資の調達にバーネットの所へ戻る。続

いて友人とチェナ川の北部へ移動するが、冬にそこで病を得る。1901年8月26日、バーネットは冬を越すための商売拠点を作った。それが最初のフェアバンクス市の元となる。1902年7月22日、ペドロは病身の身で金を発見した。現在その小川はペドロクリークという。これがタナナ平原のゴールドラッシュの引き金を引いた。

バーネットは1902年9月8日にキャンプへ戻った際、ペドロが金を発見したと聞いて計画を変更する。まず知らせを広めるべく自分のコック和田をドーソンへやる。ついでウィッカーシャム Wickersham に出会う。彼は有名な上院議員の栄誉を称えて当地をフェアバンクスと呼ぶように提案し、自ら政府の支援を約束した（フェアバンクスは1905～1909年米国副大統領となる）。今日フェアバンクスはアラスカ第三の都市である。

1905年7月、裕福かつ有名になったペドロは妻を娶ろうと郷里へ戻り、トリニャーノの学校教師エグル・ザネッティに一目惚れするも交際はうまくいかず、単身アラスカに戻り、11月22日、アイルランド移民のメアリ・エレン・ドラントとタコマで結婚した。

ペドロは長患いののち1910年7月22日フェアバンクスで心臓発作により死亡。妻の希望により遺体は防腐保存処理を施され、サンフランシスコ、コルマのカトリック教会に埋葬された³³⁾

5.3. 考察

共に移民一世の和田とペドロを比較すると、ペドロは市民権を取得できていたが和田は繰り返し市民権を申請するも全て却下され正式に米国民になることはできなかった。2人の移民一世の処遇の違いは何によるものだろうか。直接的原因としては、第一に当初和田が密航³⁴⁾のまま非合法移民一世であったことと、第二にペドロとの人種の違いのためと想定できた。そして第三に当時の社会情勢による影響である。これを確認するためあらためて日系移民史と照合する。1906年は日露戦争終結の年でありアジアの小国が大国ロシアに勝利

した結果を受け、欧米諸国は日本に対し脅威を抱く。4月サンフランシスコ大地震が発生。同地は日系人の主要な居住地である。そして地震後同地域で日系移民に対する暴力事件が発生、10月同市日本人学童差別問が起こる。翌年1907年2月、ローズベルト大統領は日本人移民を制限しアメリカ本土への「転航」を禁止するのであれば日本人児童を公立学校に受け入れるという妥協案を示し、3月、日本人学童の隔離措置は撤回された（飯倉、2013）。これを受けて日本政府は日米紳士協約を締結して日本が自主規制的に新規移民の旅券発給を禁止する。日本人移民一世が米国に帰化不能となる素地が敷かれていたことも和田の市民権申請却下に影を落としたと考えられる。

ここで和田の娘日米子がサンフランシスコに居住していたことにも思い及ぶ。サンノゼの子孫訪問調査の際、David O'Hare へのインタビュー中、日米子は生後15歳までサンフランシスコダウンタウンの中心地に住んでおり、十代前半で近くの会社に就職したという証言があった。地震の後郊外へ転居し、何年か後さらに郊外へ転居した。「地震を恐れた」「苦勞をした」という表現をしたが、これはまさに日系人への差別を恐れポルトガル系白人の（育ての）母を傘にして日系人であることを隠し目立たないよう次第に郊外へと転居したのではないか。

和田自身の動向に戻ると、バーネットとペドロはアラスカに定住したのに対し、和田が決して定住地を持たなかったことが、その足跡が容易に消える原因となり市民権取得却下に響いたものと考えられる。筆者がカナダホワイトホースのユーコン大学（Yukon College）を訪問した際の聞き取り証言が印象的であった。「エスキモーは通常村を創っている部族内だけで暮らし、同じ民族でさえ外部との接触を持たなかった。重次郎はそんなエスキモーの村々を転々と移動してゆき、部族間の連絡役としても活躍した。エスキモー達は重次郎により初めて他部族とのコミュニケーションをはかることができた。だから3つの部族を統括するキングに奉られたのだ。しかし一度として自分の土地、家を持たなかったために何の痕跡も残らなかった。現地では後世彼を讃えようにも物理

的な証拠がない。これが後年彼が忘れられた原因だ」という³⁵⁾

6. 新聞記事と他の刊行物

確認済みのものだけで110本に及ぶ新聞記事を第1次資料として分析し直す必要があるが、ここでは主に見出しに滲出する評価の変化を辿った。以下に抜粋する（下線は筆者による）。

6.1. 新聞記事

The Yukon Sun 紙, Saturday, January 17, 1903

The holes that have proved the wealth of the country were only sunk late this winter, and the first man to reach Dawson from the country has just arrived. He is a Japanese, J. Wada, well known in Dawson, whose variety and honesty are his chief traits.

Nome Alaska 紙, Saturday July, 1903

Nome Weekly Gold Digger 紙, November 12, 1906

WADA, CHIEF ICY CAPE NATIVES

Wada's story is rather an interesting one.

...

Wada is a wonderful musher.

...

Wada has some knowledge of medicine and hygiene, and exercising it, he saved the lives of many of the Indians.

...

Bowing low in humidity, the natives offered to make him their chief and to pay to him a tribute of all their furs and ivory and other proceeds of the chase. To

Wada's credit, it is said that he refused the greater portion of their tribute, but agreed to become their chief.

...

Wada took unto himself a wife to help him rule the destinies of the little tribe, and from that time until a few days ago, his lucky star became dimmer and dimmer until he finally landed in the federal prison under an indictment charging him with larceny a bailer.

...

The whalers refused to pay anything, like the ordinary price for whalebone and furs. They also told the natives that Wada was a false prophet and a bad man generally. The natives, however were loyal, and when Wada told them not to trade their goods for the price offered, they obeyed the command.

The whalers were exceedingly angry at Wada, ...

WILL MUSH TO HERSCHEL ISLAND

J. Wada, a Japanese, who is well known in this and other section of Alaska, leaves tomorrow on one of the hardest trips that has ever been made in the section of Alaska.

...

Wada is very chary about talking of a discovery. It will be remembered that he was the first man to reach Dawson with the news of the strike on the Tanana,

...

WADA IS IN-LUCK / JAP WHO STARTED TANANA RUSH HAS RICH CLAIM IN CHANDELAR / CHECKERED CAREER / SON OF THE LAND OF RISING SUN HOT AFTER THE RICHES

金鉱掘りや捕鯨従事者たちは一攫千金を狙うギャンブラーの集まりであるから、儲けることに敏感で常時殺気立っている。通常より喧嘩早い。これが普段である状況で修羅場を切り抜けていく重次郎の機転と行動力は並外れていると感じる。捕鯨従事者が糾弾したのはエスキモーの交易を上手く取持つ和田への嫉妬もあるだろう。

好意的なコメントとしては「アジア人だが採掘を認められた」とある。

1909 11. 03, 11. 20 Wada is forerunner

1909 12. 03 Wada the Jap is in search of Lost Mine

1910 2. 26 Frank Cotter tells (和田に感銘し同行手記を発表)

1912 3. 25 Jujiro Wada again has the Gang Guessing,

タバスコ王マキルヘニーとの協働の動きに対応する近い時期の新聞記事を拾うと次のものがある。

1912 10. 30 Japanese prospector brings good news, Jujiro Wada, Pioneer of Arctic,

Dawson Daily News 紙 1913 1. 11

Wada Forms a company with a million, / Plucky Jap, Formerly of Dawson, again in the Limelight, is going in for mines, establishes an alliance. / The Tabasco King of America

形容詞 plucky (勇気ある, 大胆な), again in the limelight (再び脚光を浴びて

いる)は賞賛の表現であり、やはり好意的である。

重次郎はまさにアラスカで助けたことから友情を培ったマキルヘニーと大事業を起こそうとした。翌1914年、第一次世界大戦が勃発する。和田に対する表現に注目したい。当該記事は1913年初頭のものである。

そして日付不明だが以下の記事もおそらくこの頃と考えられる。

CORDOVA DAILY TIMES 紙

AMERICA WARNED OF JAPANESE MOVE FOR GRIP ON ALASKA ;
TREASURE MUST BE GUARDED

(アメリカはアラスカを掌握しようとする日本人の動きを警告。宝の保護は必至)

この見出しでは日本人を米国の脅威と見做して警告をしており、何としてもアラスカの資源を守らねばならない、と和田を敵視する立場に変わった。

1914 09. 05 09. 19 行方不明となり一人娘の日米子が新聞記事を出す。

1916 05. 15 Wada insists he wasn't murdered.

そして新聞紙上では7年程の空白の後再び動向が注目されている。

1923 03. 22 3 Fort norman oil wells are flowing, says Jap prospector

1923 05. 17 Wada to be in Dawson soon on way to Arctic

1923 05. 18 Jujiro Wada still on mush

1924 05. 14

WADA BACK FROM A LONG JOURNEY

(以下は抜粋記事の筆者訳)

魅力あふれる日本人金探鉱者がハーシェルから戻った。 2,500 マイルの雪道はたった5匹の犬と単独で開拓したものである。

32年前に初めてサンフランシスコから極北へ来て以来獲得してきた優れたマッシャーと金探鉱者としての幅広い評判を保っている。

これは日付不明の記事で、「32年前」が正しいならば同記事は1924年、重次郎が49歳の時のものになる。書き方は好意的であり、下線で示した部分の形容詞 *picturesque* にもその一端がうかがわれよう。

Fairbanks Daily News 紙

1927 03. 21

Where is J. Wada

1937 03. 07

Wada is in the city March 5

1943 04

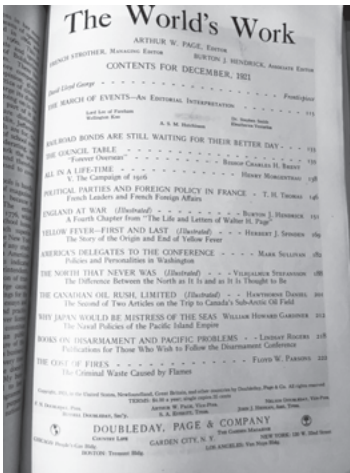
Saved by a clipping

6.2. 定期刊行物

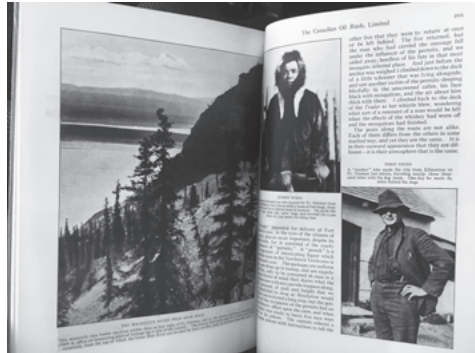
2018年9月 San Jose 訪問の際、調査熱心な親族との面会が実現し新聞以外の定期刊行物の現物を入手した。体裁は2号分を一冊に製本してあり、その1つの号に和田が半身写真つきで紹介されている³⁶⁾(資料5, 6)

- ・ The World's Work Doubleday 誌, 11, 1921, Page & Company
- ・ The World's Work Doubleday 誌, 12, 1921, Page & Company

2号共カナダの油田開拓に関する記事があり、和田が米国アラスカで失踪し



資料5 The World's Work
1921. 12. 表紙



資料6 左：マッケンジー川 右：和田肖像写真

た1914年から7年後、消息が判明したことになる。同誌の11月号、12月号共記事の主見出し The Canadian Oil Rush Limited で Hawthorne Daniel なる人物が自らの撮影した豊富な現地取材写真と共に執筆している。11月号の副題として「Ft. Norman への旅に関する2つの記事のその1ならびに北極圏のすぐ南に位置するマッケンジー川流域の油田」77-88., 12月号の副題は「Ft. Norman 油田への旅に関する2つの記事のその2およびマッケンジー川峡谷と北極の通商地点」201-211. で、和田の写真は後者の205. 写真のタイトルは JIGRIO WADA (ママ), 「4匹の犬の隊を組んで昨冬 Ft. McMurray から Ft. Norman に向け出発した日本人(石油) 試掘者, 4匹のうち3匹はかつてハーネス(装着帯)を付けたことがなかった。彼は全行程を通して同一の犬と共に旅し, 579時間で2,500マイルを制覇した。」と説明がついている。

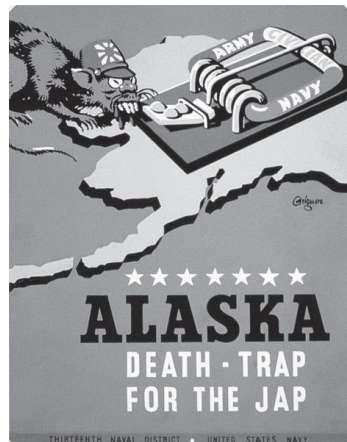
このほかに興味深い記事として、11月号に William Howard Gardiner という人物が Inside and Outside The Open Door という見出しに「日本の前に横たわる選択。その決定が我々に意味するもの。武器の制限との関係」(拙訳) という

副題をつけ、着物姿の女性を配した宮島や蓮の茂る堀、農民を前景に入れた富士山などの大型写真と中国、満州の写真も加え、日本の開国、野心、人口増加、植民地主義、産業化などをデータを交えて論じ、最終的に米国が日本の帝国主義を擁護すべきか否かといった問題を緻密に論じている。(89-102.) 12月号では11月号と同 William Howard Gardiner が Why Japan Would Be Mistress Of The Seas というタイトルに「アメリカの偉大な海軍大佐 Admiral Mahan の著書が日本の海軍政策を指南した。その政策が合衆国に対して意味するところは何か」という副題をつけ、過去3世紀間の人種拡大勢力の結果を示すものと過去16年間に海洋勢力の成功を示すものと2種類の世界地図を示し、前号と重なる日本の植民地化、人口増加問題を挙げた後、太平洋沿岸における日米の勢力範囲を論じ、日本による帝国主義的ではなく平和主義的産業化が日米間の友好関係への道筋であると述べている。

総じて The World's Work Doubleday 誌は、感情に走らず冷静に国内外の情勢についての論評をしており、黄禍論を煽る風刺画を掲載していた大衆紙とは質が異なるものであり、和田が偏見もなく同誌に紹介されていた。

一方同時期に日本脅威説を煽る言説、プロパガンダも盛んに発行されたが、一目瞭然なのは風刺画である。典型例として、2018年7月14日～10月8日、北海道立北方民族博物館にて第33回特別展 North to The Future 北方から未来へ、日本人が会ったアラスカと題した展覧会が開催され、和田が松山の母に送ったエスキモーの物品や手紙を展示した。同展会場に掲示されたポスターの絵柄は日本人を招かれざる客として痛烈な皮肉を込めてある。(資料7)

アラスカに関するこれら同時代の2種類の出版物とポスターが示す方針を比較してもわ



資料7

かるように、日本人に対する印象は両極端を示す。メディアの与える役割と影響は大きい。

最後に、和田の没後、しかも第二次世界大戦中、日系人が強制収容されている期間にもかかわらず当記事を発表したのが The Alaska Weekly 記者、Armond である。彼は記事の中で和田重次郎の動向を見直し、和田がアラスカ開拓の貢献者であったことを認めている。

・ Alaska Magazine 誌, 1988 This is My Country
本誌上において Robert De Armond は和田の功績を紹介した。

お わ り に

和田重次郎は 20 世紀初頭に渡米した非合法移民一世である。その顕彰活動と移民個人史を概観した。和田は厳しい気候と未踏の地アラスカを舞台にゴールドラッシュで名高いタナナスタンピード (Tanana Stampede) の火付役となり、アイディタロッド (Iditarod) そしてユーコンクエスト (Yukon Quest) という 2 大犬橇レースコースの原型となる雪道 (Trail) を開拓した。また、原住民に対しては部族間の交流を生むと共に毛皮取引で生活向上に貢献した。アラスカで金鉱採掘を断念した後にはカナダ政府の依頼で油田開拓にも携わった。

日系人コミュニティに属さず単独行動を続けた和田は極北、アラスカ、カナダのどの地にも定住地を持たなかったものの当時の主要メディアである新聞記事に数々の跡を残した。しかし 1914 年を境に頻繁であった記録も停滞気味となる。同年の報道によると和田は金鉱を発見したことで大きく報道されている。そこで金鉱採掘権の登録にあたり協働した日系移民の和田、イタリア移民のペドロ、白人米国人のバーネットの三者に注目し、それぞれのエスニシティを含め比較するとともに、当時の世界情勢と日系移民史に関わる事象も考察した。第一次世界大戦後、排日の気配は米国南北国境のトランスボーダー的移民の移動にも影響を与えつつ 1924 年の排日移民法に至る。黄禍論がヨーロッパ

から北米へ浸透してきた時代に和田が居合わせた不運は和田の実業家としての成功を阻んだ。

和田が不合法日系一世の身で市民権取得も叶わなかったことは即ち財産を所有できないことを意味し、「住友になる」という言葉が象徴する和田の移民の本質的動機の完遂を阻む致命的な仕打ちとなるが、和田が果敢にアラスカ、カナダを開拓し、結果的にその後の同地域発展に寄与した功績は大きい。そして重次郎が故郷愛媛の母へ便りと送金を絶やさず孝養を尽くしながらも日本に帰る意思はないことを表明し、迷いなく移民一世となることを選択し米国に骨を埋めた「渡米熱」の時代の一人の申し子であることを正しく記憶に残すべきである。日系人コミュニティを対象に集団で捉える移民研究の方法とは異なる個人移民史研究の可能性を今後も引き続き模索したい。

註

- 1) 日米新聞社編『在米日本人人名辞典』（1922）には、人名辞典の前に「在米日本人史略」として「加州の日本人」などと11カ所地域別に項目を設けた記述がある。「加奈陀の日本人」までであるがそこに「アラスカの日本人」はない。和田は移民先で形成されていくコミュニティには無縁の単独行動者であった。
- 2) 愛媛県松山市のアマチュア劇団みかん一座による。経緯として、1997年、愛媛の民放（株）南海放送の田中和彦は、谷有二の著書に感銘を受け「オーロラになったサムライ」と題するラジオドラマを制作放送しており、顕彰会が地元劇団みかん一座にミュージカル上演を打診した際、ミュージカル台本は谷有二の著作、上記のラジオドラマをベースにして座長戒田節子が仕上げた。2011年12月松山市民会館と内子町内子座、2013年1月東温市坊っちゃん劇場にて2公演した後、2015年5月アンカレッジパフォーミングアーツセンターにてアラスカ公演を果たした。
一方既に2003年、北海道放送ではプロデューサー河野啓（松山出身）が「オーロラのサムライ」を制作放映していた。
- 3) 先行研究としなかったのは資料が学術刊行物ではないためである。
- 4) 映画では穴戸錠がその一瞬のシーンを印象付けた。
- 5) 一部本人による訪問が困難な地域では子息の谷真人に現地資料収集を託したので資料について把握されており、著者没後も顕彰会は協力を得ることが可能となっている。
- 6) アラスカ訪問の際フランク安田の息女に面会し、自宅で遺品等を見せていただきながら

話を伺う機会を得た。当然ながら『アラスカ物語』の主人公は実在の人物をモデルにしたフィクションであり、フランク安田と同一視するものではないことを心得ておかねばならない。

7) この資料は2018年親族の希望により再び顕彰会から和田家へ移動した。

8) これより以前、2010年には松山の顕彰会の招待によりアラスカ大学国際北極圏研究センター名誉所長（当時）赤祖父俊一氏が来松し、一時的であるが和田重次郎研究と顕彰への協力を得た。

なお本稿執筆過程において科学・技術研究会掲載論文 Who is the samurai musher? Jujiro Wada を認めたが、愛媛の和田重次郎顕彰会が調査活動のために依頼した協力者達はその過程で得たものも情報源となっている。赤祖父俊一に一章を割り経歴を列記しているが内容は当該論文表題の和田重次郎とは関係がない。現在御本人は顕彰協力から距離を置かれている。

file: //C:/Users/Wadaju/Downloads/JStage%20paper%20about%20Jujiro%20Wada.pdf

9) 飯野雅子・浅香幸枝（2018）は現状と展望と題した北米・カナダを中心にした研究動向に関し、国際共同研究の増加について次のような見解を示している。「もう一つ、研究の幅を広げる多様な視点を取り入れる方法として、日系人コミュニティの協力を得ながらの研究も進んでいる。」そしてある研究プロジェクトに言及し「カナダの日系人コミュニティのリーダーなども関わって、調査が進められており、その成果は公開シンポジウムなどで伝えられている。新しい形態の研究として興味深い。」このような現地の日系人コミュニティの協力を得て連携していく方法について肯定的に捉えることができた。

10) *Galaxy Science Fiction*: December, Dec. 1965 (1965) (分筆), *Romance Film: Passion Strategies In Film And Life* (2015), *The Cinema of Robert Zemeckis* (2013), *The War Film (A Pyramid illustrated history of the movies)* (1974), *American Skeptic: Robert Altman's Genre-Commentary Films* (1982), *The Cinema of Stanley Kubrick* (1989) (以上単著)の著書がある。

11) 2018年9月16日、米国カリフォルニア州サンノゼ (San Jose) にある David O'Hare の自宅を訪問、聞き取りをした。David O'Hare は2005年、Norman からの連絡を受け面会した際、自分が日米子の孫、重次郎の曾孫であることを知らされた。その際 Norman は相当の資料を収集しているようだったが本を書こうとしており意図的に多くを語らなかったという。その後連絡が途絶え返事が来ない。面会時15歳の息子がいたので本人が重病または故人となっているなら現在20歳代と思われる息子に資料の提供を求めたいと語った。(談話)

12) また同地域訪問中ホワイトホースにある「ユーコン・アーカイヴ」(Yukon Archive) とドーソンにある歴史博物館 (Dawson Historical Museum) にて一部の資料のみコピーし持ち帰った。改めて調査が必要である。

13) 地元調査による。発見された米国の死亡診断書には1872年2月12日とあり診断書は誤りか。

- 14) 和田の生地小松に近い国安村は和紙の産地で製紙業が盛んであり、当地域の住民が松山に移り住んだ地域に新場所も含まれていた。国安も小松も周桑郡から東予市を経て平成の大合併で西条市となった。
- 15) 現在の住友銅山跡地は「世界的産業遺産の里 マイントピア別子」という娯楽教育施設と広瀬記念館と共に往時を偲ぶことができるようになっている。最盛期には人口が増加し大学も設置されていた。
- 16) 20世紀の初頭、明治の人々を太平洋の対岸へと駆り立てた熱病を指す言葉である。
- 17) 直接的には船内で働く同僚であっただろうが代表人物として言う。
- 18) 現住民族はアラスカではエスキモーと呼ばれているがカナダではこの語が人種差別にあたるとし、文書によってはイヌイトと言い換えている。
- 19) Point Barrow の北東部に位置する。
- 20) 後年1924年にノームでジフテリアが大発生した際、和田重次郎の開拓した雪道が元となってできた雪道を逆走してノームまで犬糞で血清を運ぶことができ、多くの命が救われた。さらにこれを記念して1973年、世界最長の犬糞レース、アイディタロッド国際犬糞レースが始まった。
- 21) 地図は、2015年5月のミュージカルアラスカ公演を観た観客の一人 Tim Kanady が自宅の地下に保管していた地図を思い出して顕彰会に知らせたものである。(愛媛新聞2016年1月4日付)
- 22) 実際に埋葬場所を特定したのはシアトルの日系二世故 Norio Mitsuoka である。サンディエゴの日系人の人々がサンディエゴ近郊の主な教会や病院にコンタクトし、数年かけて漸く1980年代後半に死亡診断書を探し出したという。発見時には葬ったとされるところも既に区画整理されていた。

当時は教会、墓地も紙媒体での保存だったが、今は電子化されているので探せば何か記録が見つかるかも知れない。(谷真人談2018.9.28)
- 23) 2018年9月16日、日米子の墓を訪ねた。墓碑には「Helen F. Meddock/1900-1965」と最後の夫の姓でその家族が埋葬している。生没年の下に「MOTHER OF SIXTEEN」と書かれ、数え忘れたのか一人足りない。(実際には17人で、最後の娘だけ存命中である。遠方に嫁いだため David O'Hare は Helen を囲む親族の集まりで1985年に最後に会ったきりとのこと。David は祖母が裕福だったからではなく苦勞をしたから5回も結婚したと解釈する。また、日米子は当初 San Francisco 中心街に広大な農場を持っていたが1906年のサンフランシスコ大地震で恐怖を感じ、郊外の Oakland に引っ越した。後にさらに郊外の農場へ越したと説明、サンフランシスコ中心街にとどまっていれば子孫は相当な資産家になっていただろうという。
- 24) 市内に日本町がある。戦前この地域で農場経営で成功していた日系人が多く、戦後強制収容から解放された後できたものだが、アラスカだけでなくそこでも和田重次郎のレガシーを引継ぐため何らかの慰霊行事をしたいものだと語り合った。

- 25) 多くの親族は一族に日本人の血が入っていることに驚くとともに大変興奮し、そして重次郎から日米子へ、その子孫へと DNA が受け継がれたことを心から喜んでいる。しかしなかにはそれまで自分の祖先はポルトガル出身と信じ、ポルトガルの慣習に親しみポルトガルを愛でただけにどうしても容認することができず無視する系列の親族もいる。日米子 (Helen) の母親とされた人物は調査を進めるうちに矛盾が生じ、育ての母と考えられるようになったが、その育ての母がポルトガル移民であったため、子孫はポルトガルを先祖とすると信じてきたからである。しかし近年簡単に利用できるようになった DNA 鑑定で、日米子の子孫にポルトガル人の血は含まれていないことが判明した。
- 26) ドイツの風刺雑誌『ヴァーレ・ヤコブ』掲載の「アメリカの日本人スパイ」‘Japanische Spione in Amerika’, Wahre Jacob, n. 551 (1907/09/03) : 5521 では日本人は蟻で描かれている。「アンクルサムは蟻塚の上に座っていることに突如として気づいてぞっとしているものの、この執拗な来訪者をくいとめることはもはやできない、という。黄禍のヴァリエーションの一つが、欧米に押し寄せるアジア系移民であることを考えると、日本人移民があまりのスパイとして表現されたことは実に示唆に富んでいる」(飯倉, 2013)
- 27) 3人で金鉱を発見した時にはまだフェアバンクス市とは呼ばれておらず、金鉱発見の知らせで他の金鉱掘り達が殺到し、人口が増えて後に都市となった。仮にそう呼ぶ。
- 28) 和田重次郎顕彰会事務局上岡は2009年タバスコ本社に、2016年その東京支社に連絡を取った。ルイジアナ州 Avery Island にあるタバスコ本社内、Shane K. Bernard, Ph. D., Historian & Curator と上岡は2009年9月23日と11月3日電子メールでやり取りをし、2010年1月10日付で資料 CD と絵葉書を郵送で受け取ったがその後連絡が途絶えている。タバスコ本社アーカイブでは和田に関する資料を多く所蔵しており、多くはマキルヘニー三世と和田が1910~1912年金鉱発掘に携わった際のものである。顕彰会の把握では1897~1898年の捕鯨船難破事故によりポイントバローで氷山に閉じ込められたマキルヘニーを和田が救助して友情を築いたことになっているが、タバスコ本社側ではマキルヘニーが日本人を救助し、その日本人は高貴な身分にある武士の息子でお礼に皇居の wasi (ママ) 蜜柑の木を送ったという。立場は双方で逆になっているがタバスコ本社に残る2人の通信は本物であり今後の調査を要する。
- ミュージカル公演を機に発見された地図は和田がニューヨークで作らせたもので、マキルヘニーと協働した金鉱開発の目的があったと考えられる。
- 29) 「和田重次郎顕彰 国際シンポジウム」2017年11月18日、松山市坂の上の雲ミュージアムロビー (『日本少年』重見周吉の世界展会場) 内) 1時間のシンポジウムはラジオ生放送も兼ねていたため話を掘り下げることはできなかった。筆者は当該コメントを通読。
- 30) https://en.wikipedia.org/wiki/E._T._Barnette#The_Fairbanks_Gold_Rush フェアバンクスのゴールドラッシュの項の記述 (編集集中)。またここに和田の名も登場しているのを認めた。そこで和田の名をクリックすると、Jujiro Wada 単独のページが立ち上がっており、末尾の記録によりこの記事は2018年7月14日 20:13 (UTC) に最終編集されたことを確認した。

また先の E. T. Barnette のページは 2018 年 7 月 25 日 20:00 (UTC) に最終編集されていた。これらの情報は近年まで存在しなかった。米国内でも最近急速に調査が進んだことを示す。(2018 年 9 月 30 日時点の確認)

- 31) 2017 年 9 月 17 日付新聞 *Gazzetta Di Modena* 紙に *Fanano e il Giappone si gemellano nel nome di Felix / Delegazione dal Sol Levante in paese per celebrare l'esploratore nipponico Wada e l'avventura con Pedroni* という見出しにカラー写真つきで記事化された。博物館はロマーナ州モデナという、トスカーナ州と州境で接する標高の高い山間部にあり、二度の世界大戦で激戦区でもあった場所である。博物館は武器や兵士の遺留品など戦争で埋め尽くされていた。そこは偶然にも第二次世界大戦中の日系人部隊第 100 大隊と第 442 連隊が激戦を繰り広げた地でもあったのである。その同じスペースの一角にペドロの展示を加え、和田重次郎もメンションされようとしている、日系人という共通項で歴史の逆順上書きともいべき行為が行われようとしていた。
- 32) ペドロについては *Tourchi* が博物館の展示と共にウェブサイトを開示している。ただしイタリア語で書かれているため本人に英語版を依頼し、入手することができた。
- 33) *Massimo Tourchi* の資料を筆者が要約翻訳した。
- 34) 初めての渡航は明らかに密航であり、その時の模様は重次郎の奉公先、戸田製紙の戸田金兵衛が東良三の質問に答える形で残っている。一時帰国した後の再渡航ではどうだったのだろうか。谷は、そのときに横浜からシアトル行き客船が出港したので、重次郎は乗船客として渡米しただろうと述べる。この時には既に母親に度々送金し、一時帰国し、母親を京都見物に連れていくなど金銭に余裕を持っていた。乗船客名簿に名前はあるのか、またこのときは合法的渡航者だったのか、まだ確認が取れていない。再度密航したなら正規旅券が発行されなかった理由は何なのか。検証が必要である。
- 35) 当時日本人留学生（中川）の重次郎に関するレポートを指導した *Amanda* の言。(2016. 9. 20)
- 36) 2018 年 9 月 17 日、カリフォルニア州 *San Jose* に和田重次郎の曾孫 *David O'Hare*、その娘で玄孫の *Heather* の自宅を訪ねた際、そこに集った *David* の従兄弟 *Rick Medeiros* がネット購入し、愛媛の顕彰会に寄贈した書籍。

和田重次郎の新聞報道記事リスト

紙名	国・地域	記事数
Nome Daily Gold Digger, Alaska,	USA	1
Yukon Valley, Yukon,	Canada	1
Tanana Weekly Miner, Alaska,	USA	1
Daily Gold Digger, Alaska,	USA	1
Yukon World, Dawson,	Canada	1
Seattle Post Intelligencer, Washington,	USA	3

Fairbanks Daily Times, Alaska,	USA	5
Seward Weekly Gateway, Alaska,	USA	12
Yukon World, Yukon,	Canada	1
Yukon Daily News, Yukon,	Canada	1
Fairbanks Weekly Times, Alaska,	USA	1
Seward Lifebar Gateway, Alaska,	USA	1
Nome Gold Digger, Alaska,	USA	1
Fairbanks Times, Alaska,	USA	2
Gold Weekly	不明	1
Iditarod Pioneer,	USA	1
New York Times, New York,	USA	1
The Winnipeg Evening Tribune,	Canada	1
Alaska Weekly, Alaska,	USA	2
Fairbanks News Miner, Alaska,	USA	1
San Diego Union, California,	USA	1
Alaska Life, Alaska,	USA	1
Alaska Magazine, Alaska,	USA	1
Cordova Daily Times	USA	1

引用文献

- 国立歴史民俗博物館. 2010年3月〈特集展示〉「アメリカに渡った日本人と戦争の時代」
8. 12.
- 外交史料館. 外務省マイクロフィルム 明治時代渡航者記録 (2017年5月調査)
- 日米新聞社編. 1922年11月『在米日本人人名辞典』目次.
- 日本移民学会. 2018年4月『日本人と海外移住 移民の歴史・現状・展望』明石書店 270.
- NPO法人和田重次郎顕彰会. 2016年12月「オーロラに駆けるサムライ和田重次郎ガイドブック」1-15.
- 徳永悠. 日本移民学会. 2018年6月「排日移民法と在メキシコ日本人-米墨国境地域における日本人移民社会圏の発展-」『移民研究年報』24. 65-69, 75-78.
- 東栄一郎. 2014年6月「民族発展の先駆者」-歴史の創造と人種的アイデンティティ『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで -忘れられた記憶 1868-1945』159-161.
- 日比嘉高. 2014年2月『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』第1章 移民の想像力 1 アメリカへ 37.
- 飯倉章. 2013年3月『黄禍論と日本人』第七章 移民紛争から戦争論へ, 第八章 甦る黄禍のイメージ 146-246.

Jujiro Wada, A Japanese American Pioneer in Alaska : His life and the situation among three people who cooperated in finding a goldmine

KAN Noriko

The primary destination for Japanese immigrants to North America was initially Hawai'i, beginning with an officially designated group started by Gannenmono in 1868. Japanese immigration to the U. S. mainland increased in subsequent years. Some in this latter group were directly from Japan, while others began their move by first relocating to Hawai'i. This practice continued until immigration was prohibited entirely by the Immigration Act of 1924. In fact, a restriction had been imposed before the Act was established, and overseas trips had become more difficult little by little. In addition to legal immigrants, there were many who entered illegally due to various motivations and circumstances.

This paper focuses on an illegal immigrant named Jujiro Wada who stowed away on a ship bound for the U. S. mainland in 1892. The first section introduces the research that was conducted in both Ehime, Japan and Alaska, U. S. A. The next section overviews the resources collected in both locations and describes Wada's individual immigration history. Wada is particularly notable for his pioneering experiences in Alaska and Canada, which were frequently reported in the newspapers. However, his exposure to the media diminished after he found a goldmine with two other people. He then remained in obscurity until he died alone in 1937. The third section profiles the two people with whom he found the goldmine, paying special attention to their ethnic backgrounds. Finally, the paper compares the tone of the later lives of these three people, contrasting the world's international situation with their own, and concludes that the fading of Wada's name from the media was caused by the pervading fear of the "Yellow Peril."

Key words : individual immigrant history, Alaska, goldrush, media, citizenship